

## バーチャル大学連携センターのある風景(平成 35 年の大浦半島)

ちょっとタフな峠だったが、重たい荷物を背負いサイクリングしてここまで来た甲斐があったというものだ。

ここから見下ろす眺めは、まさに絶景だ。

美観地区に指定された近畿でも屈指のここからの眺めは、元をただせば、平成 14 年度大学連携センター構想具現化調査研究事業によってもたらされたもので、まさに人間の叡智と自然美との結晶である。

リアス式の海岸の向こうには、いくつもの神秘的な島々、そして海に浮かぶ無数の美しい船。

肉眼で確認する限り、舞鶴の漁船よりも、アジア船籍の船が目立つ。

明日から 3 日間、ここ舞鶴で北東アジア首脳会議が開催される。

(そういえば舞鶴の鉄道や港の周辺は、厳戒態勢がしかれているとニュースでやってたなあ。)

それにしても、驚きだ。

この町は、町中どこにいてもインターネットに接続できる。

峠の中腹の休憩所ですら、無線 LAN の基地局になっているのだから。

私は、この休憩所で愛用の超軽量モバイルパソコンと LAN カードを使ってインターネットに接続、これを使ってこのニュースを知ったのだ。

大学連携センターによる功績は大きい。

京大、ポリテク、舞鶴高専と地元の IT 関連団体などが連携し、みるみる間にあらゆる場所に、無線 LAN の基地局が設置されたのだ。

驚くのはそれだけではない。目を疑いたくなるようなパノラマが、眼下に広がっているのだ。

ホントにここは日本なのか？

建造物のレンガの色と森林の緑の見事なコントラスト。舞鶴ポートピア（北東アジアとの貿易の新拠点）から、この峠の山頂にある自然文化園までの遊歩道兼サイクリングロードは、京都芸術大学の学生のアートストリート。

敷きつめられたタイルもすべて、彫刻が施してあり、街路灯もモニュメントもすべて学生が在学中に創作制作した作品である。

(ここ最近では、学生と地元の小学生の交流が図られ、小学生の作品も使用されるようになった。)

ちなみに、レンタサイクルの自転車は、すべて放置自転車をいったん京都工芸繊維大学に運び、匠（ビフォー&アフター）の技で見事に再生、そして遊び心を加えた楽しいものになっている。

レンガの建物（ここはレンガと緑の美観地区なので建物の外壁は 55% 以上レンガ材を

使用しなければならない、敷地の30%は緑地化しなければならないなどの制限がある。またレンガは地元神崎地区のレンガを使用した場合は、市から一部補助金が出る仕組みとなっている)は、民家や市営住宅もあれば、公共の施設もある、そして大学連携センターの情報発信基地もここにあり、大学と地元企業の共同研究・共同開発などもここが起点となっている。

舞鶴市域全体がキャンパス化されたが、それでもここでの学生の数は突出していて、「石を投げれば学生に当たる」とまでいわれている。

いつのころからかここは、学生街といわれるようになり、舞鶴のファッション、音楽、映画、食などの文化はここから発信しているといわれている。

学生が、町に滞在する期間が長くなってからというもの、さまざまな文化に変化が見られるようになり、新店舗が増え、町全体に活気がみなぎるようになった。

福祉系・医療系の学生が、地元の病院・福祉施設でフィールドワークするようになり、高齢者との交流も生まれた。

また市が、自然文化園の運営、管理を全面的に大学連携センターに委託(京都繊維大学・立命館大学・ポリテク・舞鶴高専ほか)が参加し、学生の潜在能力を引き出すことに成功し、また市を介さずに直接大学連携センターが地元企業に仕事を発注するシステムを構築することで、社会的にも高い評価を得て、ますますいきいきとした町となった。

北東アジア首脳会議のつぎの大きなイベントは、世界大学博覧会。もちろん開催地は舞鶴である。

「座長！いい風になりました。いつでもOKです」

そう、私は自然文化園にパラグライダーをするために、ここまで自転車で駆け上がってきたのだ。

「よっしゃ！いまいく」

「はいっ。先生(座長)」

堅太郎は、少年にかえって大空に舞って、改めてこの風景を見下ろした。

H15.2作